

漢字学習書各種アプローチの検討（2）

— 字素アプローチ：形音義の狭間 —

カイザー シュテファン

要 旨

漢字の学習・指導は伝統的には丸暗記や繰り返し書く方法で行われてきた。しかし、一方ではいわゆる形・音・義など個々の要素による記憶法、またはその組み合わせによりいろいろな方法が考案されてきた。そういった方法の主なものを以前に7つのタイプに分類してみたが、本稿ではその中で漢字の部分を「字素」として分析した上で再構成する方法をとりあげ、その性格と問題点について検討する。

中国における伝統的な漢字の配列法・学習法の特徴を概観した上で、19世紀から20世紀の初頭に及ぶ中国とその周辺に滞在した欧米宣教師の作った漢字の参考書の画期的な試みを紹介する。彼らは部首と並んで字素を広く使っており、中国人の発想にはなかった、たいへん徹底した分析を行った。彼らの業績と対照しながら、字素の考え方に基づく日本語教育の参考書として海外で作られた著書を取りあげ、その漢字学習・配列の方法を検討し、その利点と問題点を明らかにする。

【キーワード】 漢字 漢字教育 字素 音符 形態 意味

Approaches to Kanji Learning (2): the grapheme-based approach: between meaning, sound and shape

Kaiser, Stefan

The study and teaching of kanji in Japan and abroad has traditionally relied on rote learning and repeated copying of kanji. However, to facilitate the learning of kanji, a variety of ways of memorizing them on the basis of their shape, sound or meaning have been proposed. Having previously divided the major approaches into 7 types on the basis of their characteristics, this paper examines in detail types 1 and 4, which share the characteristic that they are grapheme-based, while differing in the degree to which they take sound and meaning into consideration.

An examination of the Western missionary tradition of analyzing kanji in 19th and early 20th century China reveals that the concept of “primitives” was extensively used in combination with “radicals”. The approach of analyzing and ordering kanji used in types 1 and 4 are explored against the background of that tradition, and its strengths and weaknesses are examined as a method of teaching or memorizing kanji.

1. はじめに

漢字の学習・指導は日本・海外ともに伝統的には繰り返し書く練習を中心に行われてきた。しかし、漢字のいわゆる形・音・義を記憶しやすくするために、いろいろな方法も考案された。そういった方法を以前七つのアプローチに分けてみた(カイザー1997:32参照)。

本稿ではその中で漢字の部分を「字素」(書記素・漢字素ともいう)として分析し再構成する方法をとりあげ、その特徴と問題点について見ていく。カイザー(1997:32)でいう1と4のタイプがこのアプローチに属するといえる。ただ、字素を単位にしながらも、1と4では音読みや意味を考慮する程度に差があることを断わっておく。

1と4のタイプを代表する日本語教育の学習・参考書としてFoerster and Tamura (1994)とHabein and Mathias (1991)を取り上げる前に、まず従来の漢字の配列・学習法を検討し、「字素」という考え方がどのような背景から生まれたかを概観しておきたい。

2.1 漢字の配列・学習法：中国における伝統的方法

2.1.1 字義による配列

漢字という文字は本来決まった順序をもっていないが、古くからなんらかの方法で整理しようという試みがなされたきた。中国のもっとも古い辞書、『爾雅』では、漢字を意味によってグループ分けをする方法をとっていたのが現在分かっている範囲内では一番古い整理方法である。記述の形式は項目によって異なっており、さまざまだが、基本的に意味上関連のある単漢字(または熟語)を挙げ、意味の簡単な説明を加える。以下1、2例を挙げる(字体は現行のものに改めた。以下同じ。なお、声調は一部ローマ字表記の右型に上付き文字に統一して示した)。

初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也(釈詁第一)

(初・哉・首・基・肇・祖・元・胎・俶・落・權・輿は始なり)

妻之父為外舅妻之母為外姑(釈親第四、母党)

(妻の父を外舅と為し、妻の母を外姑と為す)

2.2.1 部首による配列

『爾雅』より200年遅れて成立した『説文解字』で行った画期的な事業は、漢字をその部分部分に分析し、分類基準として部首を設けることであった。以来、伝統的な漢字辞書の検索は部首によって行う形をとってきている。なお、各部の所属字を画数によって配列する方法はかなり後の検字法で、17世紀初頭の『字彙』にはじめて定着したものである。

部首は漢字を意味範疇別にグループ分けしたものだが、その選択はある程度恣意的であることは、辞書によってその数が異なることから伺える。表1でいくつかの代表的な辞書の例を挙げる。

表1 中国の伝統的漢字辞書（一部）の部首数

辞書名	成立・出版年	親字数	部首数
説文解字	(0100)	09, 353	540
玉篇	(0543)	16, 917	542
五経文字	(0776)	03, 235	160
字彙	(1615)	37, 179	214
康熙字典	(1710)	47,000程度	214

2.2.2 部首自体の配列方法:意味から形へ

現行の漢字辞書の部首配列は部首を画数順に並べたものが一般的だが、それは『字彙』や『康熙字典』から使用された方法である。それ以前は意味や字形による配列が普通だった。

例えば、『説文解字』では、「一」「上」「示」「三」「王」「玉」から始まるのは字形兼意味の配列になっており、十干十二支で終わる（『玉篇』も大体同じ）点の意味による配列である。「一」「上」「示」「三」「王」「玉」などは純粹に形の配列にも見えるが、『説文解字』全体の部首配列法は陰陽五行説による宇宙哲学のような考えに基づいているといわれている。例えば、「一」は「万物の根源」のような意味になっており、「三」は「天・地・人」ということで、宇宙を代表する。540という部首の数も同じく「易」の哲学に支えられている（阿辻1985: 135ff参照）。

しかし、十二支の中で「了」が「子」の後にあったりするのは、形によるものである。『五経文字』では並べ方がまったく違うが、「豸」「犬」「豕」「勿」「馬」「鹿」「鳥」「隹」の順が見えるのも形・義の混合である。『字彙』から現行の配列になり、それにおいては画数が上位基準だが、その枠の中では形を優先（例えば、口・囗・土・士の順）する。意味を考慮すること（例えば、女・子の順）はむしろ例外である。

2.3 字音による漢字の配列

中国で早いころから盛んだった詩作においては、脚韻を踏む決まりがあり、同じ韻目に所属する字を並べる「韻書」の類が作られるようになった。部分的に現存する『切韻』は600年ごろの成立だが、韻書は三世紀のころから作られたらしい。そもそも字音を声母と韻母に分けるという発案は仏教僧のサンスクリット研究から生まれたといわれるが、調音点により5グループからなる36の声母と四声に分かれる206（後世には、106に合併）の韻母による配列法を産んだ。

2.4 漢字学習書における漢字の配列

一方、書記や官僚の資格試験のための漢字学習書は、『急就篇』や『千字文』のように、漢字をコンテキストをもった字句にまとめてリズムカルに並べ、韻も踏ませるなどの手法によって行なわ

れた。これは分析よりは総合というべきアプローチで、同じ漢字を繰り返さないで語句を並べる工夫などにおいては、日本の「いろは歌」の中国版といえる。5世紀ごろの『千字文』の冒頭をあげておく（押韻字、太字で示した）。

天地玄黄
宇宙洪荒
日月盈仄
辰宿列張
寒来暑往
秋收冬藏

3. 漢字の配列法：西洋人による「字素」の発見

中国では、上記『千字文』などを使って意味による配列で漢字を覚えていく方法がとられていたせいか、漢字の部首以外の要素があまり注目されなかった。ただ、『説文解字』の字源説では、形声文字の説明において次の形で音符（声符ともいう）を挙げるのが普通である。

「何・・・从人可声」（何は（意味上）人に従い、可の声）

辞書の親字を韻書の配列にしたがって並べる試みも行われ、宋代の『説文解字五音韻譜』などがその例である。また明代末期には、西洋人宣教師が中国語学習のためにアルファベットによる「韻書」を作り、中国語の音節（を代表する漢字）をアルファベットで50音図のような方式で表記した（ニコラ・トリゴー等⁽¹⁾の『西儒耳目資』1626）ものもある。しかし、音符など部首以外の要素による漢字の分類・配列は中国人の発想としてはなかったようである⁽²⁾。それは、中国人が漢字を音符によってグループ分けをする試みは1848年の『説文通訓定声』⁽³⁾までには存在しないことから分かる。MarshmanやCalleryの研究よりも後になるということで、西洋人の発明と見てよいようである⁽⁴⁾。

西洋人による漢字配列研究の元祖はMarshmanというイギリス人宣教師であるが、彼の考え方はどうも彼が見たらしい、ある羅中辞典から影響を受けたようである。

この（字素）というアイデアは著者が羅中辞典の草稿を見たことによってより確かなものになった。その辞書は漢字を音で分類した結果、多くの場合一つの漢字がたったの一要素を加えることによって10字ないし12字の漢字の根源をなしていた。（1814：33、強調は原著者⁽⁴⁾）

彼の考え方がどのようにして形成されていったか、彼の博士論文（Marshman 1909、東洋文庫蔵）によってある程度読み取ることができる。この博士論文は専攻研究では言及されていないが、

primary elements (根本要素) という用語を使って漢字の分類を試みている。例えば、「三つの根本要素からなる漢字」を a グループと b グループに分け、例として「語」・「聖」を挙げる。そして、b の場合は三つの別々の要素からなっているのに対し、a の場合は「吾」という単位が認められると分析している。後 (4.1 参照) でいう漢字の「増幅構造」を意識した分析だと評価できる。博士論文に大がかりな改訂を加えた著書 (1814) では中国人のアシスタントも駆使して、『康熙字典』の全漢字を資料とし、3867 の primitives (字素) を分析し、それらに 214 の formatives (部首) を加えることによって derivatives (派生字) を造字の原理とし導き出したという。分析の結果は残念ながら一部しか具体例を挙げていないが、その例からすると、以下のような内容になる。

例えば、字素「正」は部首の追加によって 22 の派生字を作る。それらを羅列し、その音・義を示した上で、次のようにいう。

音の中では 16 の (派生) 字は字素と同じ。残りは、一つの例外を除いては字素の声母と同じ帯気音 (ここでいっている帯気音とは、彼のローマ字表記が h を含んでいるくらいの意味に解される) から始まる⁽⁵⁾。(60-61)

あるいは、字素「合」が作る 69 の派生字を挙げてから、次のように続ける。

この 69 字中、30 字近い漢字が字素と同じ音を持っているのに対し、声母・韻母ともに異なる字は 10 くらいしかない。基本的な意味の「閉鎖する」、「合併する」、「閉鎖された」は大体の部首との組み合わせにより新しい意味を作り出している⁽⁶⁾。(65-68)

以上のように、Marshman (1814) は、Marshman (1809) を受けて、初めて「字素」というものを設け、形声文字が部首の添加による造字法であるという正しい認識の上に立って、その表音の規則性にも注意を払っている。にもかかわらず、彼の業績に対する評価は従来あまり高いとはいえない。例えば、DeFrancis (1984) は彼の考えを次のように批判している。

・・・Marshman はあくまで造字法における意味の役割にこだわっており、字素が「一般概念を表わす」と思い込み、目の前にあるものの意義を見落としてしまう。この見落としのために、「有益」「有利」の意味に基づくこじつけの語源説を試みている。しかし、(彼の) 漢字のリストを見ると、それは単に li⁴ (利) の表音的使用に過ぎない・・・⁽⁷⁾ (:94)

ところが、「利」の場合は別としても、例えば上記の字素「合」の場合などは藤堂 (1965) のいう「単語家族」を形成しており (藤堂 1965: 820-21 では「合・翕・裕・治・級・閣」がいっしょに挙がっている)、意味上つながっているとされている。したがって、Marshman の分析を意味に片

寄りすぎていると批判するのは必ずしも当たっていない。むしろ、形声文字は「字素+部首」からなる以上、原理的には否定できない分析であり、やはり画期的な試みといってよい。

フランスの宣教師によるCallery (1841) はラテン語で書かれた著書だが、一部はフランス語も並記している。本書一冊めの大部分は「漢字基本文字録」(Catalogus Litterarum Fundamentalium Scripturae Sinicae)⁽⁸⁾からなっており、第一部では音符 (Phoneticac)、第二部では部首 (Classificac) を連ねている。第一部は「乙」から「靈」までの1040要素からなっているが、それぞれ中国語読み、と羅・仏語による意味 (ニックネーム) が次のように挙げてある⁽⁹⁾

乙 i³ Curvum = Courbé (曲線)

第二冊では1040の要素ごとにその所属字を並べ、その音・声調や意味を示すが、音・声調は要素所属のそれと違う場合にのみ表示している。なお、各所属字は形声・会意の区別なく集められている。例えば、N.3の「十」には、什・汁・針・計などが挙がっているが、「計」は音も違っており、通常会意文字とされる。

これもフランス人による著書だが、Wiegerの初版が出た1899年という、ちょうど甲骨文字が大量に発見された年にあたる。しかし、Wiegerの研究はその成果を取り込むことはもちろんできなかった。そこで、『説文解字』などの哲学めいた字源説明が一部残っているのは止むを得ないことである。例えば、字素の3番として「三」が挙がっており、「天地人の数也」という説明を引いた上で、所属字として挙げる「王」は天地人を統一するという、『説文解字』と同じような説明になっている。ところが、甲骨文では、「王」の字は明らかに鉞の形で、権力の象徴となっているから、『説文解字』説はその後修正されている。

Wieger (1899/1932) の副題が「字源・書記法・索引」となっているが、実際はその内容に加えて「音声系列」は重要な部分を占めている。次の構成になっている。

- 1 字源講義 (1課-177課)
- 2 書記法 (金文体⁽¹⁰⁾のテキスト)
- 3 音声系列 (1から858まで)
- 4 音索引・部首索引

1ではまず224のPrimitives (字素) を画数によって配列した上で、字源講義に入る。一例を挙げると、第101課では字素「勿」と「易」を扱っているが、幾つかの系列に分けている。

第一系列A：勿 (ou²) 字原説明の後、音声系列70にリファー。意味関連字として「忽・刎・吻・笏・物」を説明。

第一系列B：易 (yang³) 字原説明の後、→音声系列497。意味関連字として湯→音声系列702。・・・

第二系列C：易 (i²) 字原説明の後、→音声系列336。

リファーされた音声系列の例を見てみると、70では先ず101課Aに逆リファーしてから、計14字を読みによってouグループ、houグループ、wennグループ所属として配列、さらに関連音声系列として407 (497の誤りか)、589 (傷などの旁)、702 (湯)、336 (易 (i、など) を参照として出す。因みに、「勿」は別の系列に所属させている (40番)。

他には、中国語についてはChalmers (1882) やSoothill (1899) などが出、日本語については後藤 (1909) があるが、いずれもCallery (1841)やWieger (1899/1932) を超えるものではないので、各書における字素数を一覧表にして示すにとどめる。

表2 初期漢字字素・音符研究書の字素数

著書	字素数
Marshman (1814)	1689
Callery (1841)	1040
Wieger (1899/1932)	858
Chalmers (1882)	300
Soothill (1899)	886
後藤 朝太郎 (1909)	828 ⁽¹¹⁾

全体の特徴として挙げられるのは、音系列には形声字のみならず、会意も含まれるということである。ただし、後藤 (1909) は音符に限って分析している。

4. 日本語教育における字素アプローチ

以前 (カイザー1997: 32) に区別した1と4のタイプは「漢字の形を中心に記憶させる方法」と「漢字の形・音・義を音符と意符の組み合わせによって記憶する方法」であったが、その代表選手として挙げた著書の中味を簡単に紹介する。

4.1 Foerster and Tamura (1994) における字素

Foerster and Tamura (1994) (以下、F&T) では、「*Kanji ABC* は漢字を辞書学的理由ではなく教育的目的から分析し、(常用) 漢字のすべての要素をカバーしている。そのような要素を字素と呼ぶ」⁽¹²⁾ (xi) という。伝統的な部首をある程度含む484の字素を設け、形の類似したものをA~Zの26グループにまとめる (ただし、一部の部首 (偏旁冠脚) は左右上下など位置によって配列する)。単純な字素が複雑な漢字の要素になるから、順序としてはその単純な字素を先に覚えるべきと著者

らは強調する。

配列の特徴としては次の点が挙げられる。近似した形の字素をいっしょに並べ、その中で音読みが同じものを並んで出すという（: xii-xiii）。巻末の一覧表を見ると、A-Zの字素のグループ分け（「図形上近似している」（graphically similar）の基準になっているのは、次のようなものである。

B「口」を含む形（口・言・占・加・召・豆・兄・・・）

C「日」を含む形（日・旦・・・旧・白・原・百・門・艮・良・・・）

F「十」を含む形（十・斗・古・固・早・・・平・羊・半・・・）

Q「ム」を含む形（ム・台・能・広・云・至・去・・・）

各字素には名前（ニックネーム）がつけてある点は Callery（1841）と同じだが、「乙」に対して Callery が「曲線」と呼んでいるのに対し、本著では“second class”と、「甲乙の乙」といっている。これは伝統部首の一つでもあるが、呼び方はいずれの場合にも字義とは無関係である。ところが、F&Tでは、「し」（「孔」などの右半分）の形を別の字素として立てるのが他と違うところである。通常は「乙」の変形として扱われるが、「乾」という一字だけの所屬字のために設けたと思われる。

本著の使い方としては、まずその字素とその名前をすべて覚えておくべきとしている。

本著の構成の例として字素Q「ム」（字素の名前は“oneself”）とその所屬字に対する情報を以下挙げる。

No	字	読み	中心義	要素義
Q1	仏	hotoke, BUTSU, FUTSU	Buddha, France	human being, oneself
Q1	払	hara(u), FUTSU	pay	hand, oneself
Q1	私	watashi, SHI	I, private	rice seedling, oneself
Q1	窓	mado, SÔ	window	airhole, oneself, heart
Q1	離	hana(reru/su), RI	separate	cap, evil, cavity, oneself, chicken
Q1	強	tsuyo(i), KYÔ, GÔ	strong	bow, oneself, insect
Q1	弁	BEN	dialect	oneself, flexible

Q1	参	mai(ru), SAN	visit a holy place	oneself, big, style
Q1	惨	miji(me), SAN, ZAN	miserable, cruel	feeling, visiting a holy place
Q2	台	DAI, TAI,	platform, counter for vehicles	grapheme
Q2	胎	TAI	womb, uterus	part of the body, platform
Q2	怠	nama(keru), oko(taru), TAI	be lazy, neglect	platform, heart
Q2	治	osa(maru/meru) nao(ru/su), JI, CHI	govern, cure	water, platform
Q2	始	haji(maru/meru), SHI	begin	woman, platform

以前からある程度部首や字素の並べ方において応用されてきた、「形による配列」を本著ほど徹底して行っているものは他に見当たらない。その結果、学習者にとって誤りやすい形が同じところに挙がっているので、混同を防ぐのに役立てることも可能と思われる。ただ、「窓」をairhole, oneself, heart(空気穴・自己・心)、また「離」をcap, evil, cavity, oneself, chicken(帽子・悪・くぼみ・自己・鶏)などとするのは果たして記憶をどの程度助けるか、疑問である。

Wiegerでどうしているかという点、「窓」の場合には「字源講義」の4Dとして「窓」を挙げ、音声系列657で總の傍の系列を列挙する。また「離」の場合、「字源講義」の23Eで字素「禺」を設け、所属字素として音声系列の616(「禺」の系列)にリファーする。

F&Tの最大の問題点は、漢字の形態を部分部分に分けただけで、漢字の「増幅構造」とでもいうべき大きな特徴を無視していることである。「窓」は決して「穴・ム・心」という独立要素からなっているわけではなく、「ム」の旧体「囟」が象形で「窓」の意味を表わしていたが、部首「心」を足すと「増幅」による組み合わせ単位で音符になり、その「ム・心」の組み合わせによる「窓」で一つの系列(總・聡・窓)をなしている。「箱」の形は伸縮自在ではあるが、いわば入子構造になっている。

4.2 Habein and Mathias (1991) における字素

Habein and Mathias(1991)(以下、H&M)を以前(カイザー1997:32)「漢字の形・音・義を音符と意符の組み合わせによって記憶する方法」としたが、基本的な要素(Basic-Forms)を区別している点では字素アプローチを兼ねている。彼らはBasic-Forms(BF)を次のように特徴づける(21)。

- 1 a BFは基本的に象形であり、意味に相当する要素に分けることができない。
b BFKは場合によって複数び形態をもつ。たとえば、「水」は「シ」などの形もとる、など。
- 2 a BFは他漢字を作るために意味的要素として使われたりもした。
b BFは複数の意味をもつ場合がある。例えば、「田」は水田の象形から来ているが、「果」では「木のなかの果実」を示し、「胃」の場合には「胃の中の食べ物」を示す。
- 3 a BFの多くは音符として使われもした。
b 音符の多くはさまざまな音をもつ。例えば、「閔」(エツ)の音符は鋭(エイ)税(ゼイ)説(セツ・ゼイ)脱(ダツ)となるように。
- 4 BFの大半は独立した漢字から始まったが、多くは早くから独立した形では使われなくなったり、その結果BFの多くは他漢字に音符や意味を表わす要素としてのみ見られる。

以上のようにBFが基本的なユニットになっているが、BFから派生漢字として次のグループを区別する。

会意文字

- イ、BFに画を足したもの。
- ロ、BFを二つ組み合わせたもの。分、休、信、男など。
- ハ、部首(部首も当然BFに含まれる)
- ニ、より複雑な組み合わせ(部首別に配列)。

形声文字

- イ、音符としてのBF(画数順に配列)召:紹、招、超など。
- ロ、音符としての会意文字(画数順に配列)化:花・貨・靴など。
- ハ、その他の音符
 - 1 常用漢字に含まれない独立漢字(之・也・云など)
 - 2 常用漢字に含まれないBF(禾・酉・亥など)
 - 3 独立漢字としての利用を失った複合漢字(「榮」・「荔」など)

「会意文字、イ」は次のような字を指す。千、久、丸、刃、年など。「年」については、もともとは「禾」と「人」からなっているが、今ではいずれも判別できないという。

ニは乳・便・後・非・履などを含んでいる。会意文字なので、複雑な字は三つ以上の要素からなるものもある（例えば、「解」は「角」＋「牛」＋「刀」で、「刀で牛の角を分解する」ような意味になる。しかし、一方では二つの要素に分けているものもある。例えば、履は尸（体）＋復（もどる）からなっているが、「復」全体が音符であるとし、F&Tの上記のような問題は起こらない。

「形声文字、ハ」では、「卯」という音符があがっており、「柳」と「貿」の漢字の説明がある。一方、「留」は「会意文字、ニ」で「田」部に収められている。Wiegerの場合は次のように扱っている。音声系列129では「卯」のもとでmao（貿など）のグループを立て、音声系列540では別に「留」のシリーズ（留・溜など）を設けている。字源講義ではさらに129Dとして「昂・貿」を挙げ、129Eとして「留・柳・劉」を別系列として出しているのが、非の打ちどころがない。

ところで、F&Tでは、「留」などは次のように扱われている。

P15 留・貿

P16 仰・抑・迎・卵・柳

これは、おそらく「留・貿」では三画目が止まるのに対し、「柳」の場合には傍の三画目が伸びる（払う）形になっているのに注目して区別したものと思われるが、字源的にまったく無関係のグループ「仰・抑・迎」と「卵」・「柳」が、一色単になっているのが、形中心の字素の考え方の一つの限界を示している。

一方、H&Mで問題となるのは、あくまでも形声与会意を分けて提出している点である。この面においてはF&Tが字形優先なので、問題にならず、Callery（1841）などと同様、「十」のところには「計」も並ぶ。ところがH&Mでは上記の「留」を会意文字として「柳」などと別のところに収め、リファーマーも付けないというのは納得しにくい。そもそも形声・会意などの区別には曖昧な部分があり、「音が合うかどうか」という判断が大きなウエイトを占める。その判断はどうも人によって違っており、たとえば、林大監修（1982）や小川編（1968）では、「劇」・「寛」を形声とするが、白川（1994）では会意になっている。「市」も小川編（1968）では会意形声というが、白川（1994）では象形となっているような具合である。因みに、H&Mではいずれも形声としている。ところが、「留」の場合には、「音が合っている」というわけで、小川編（1968）でも形声として扱っている。

この問題は、形とも絡む場合がある。H&Mで「市」をBF「止」が音符になっているグループの形声字として挙げ、「平」と音符「止」の「混合体（blend）」としているのは、字形からしてたいへん理解し難い。

総じていえば、中国語の漢字を分析した学習書が日本語を対象としたものよりも体系が緻密でよく整っている。それは、対象とする漢字の数とも関係がある。中国の漢字の場合は、Marshmanのように『康熙字典』の全漢字を対象としたものから、Soothillの4,000にいたるまで漢字のコーパスが大きいので、規則性が見出しやすい。ところが、F&TやH&Mの場合は常用漢字のみを対象と

しているから、一つの所属字しかもたない字素（「冬：終」、「尼：泥」、「有：賄」、「会：絵」など）がそうとう出てくる。後藤（1909）が対象とした5950字の「現行漢字」までは行かなくても、新聞雑誌で使われる3,000余字か、あるいはJIS第一水準の2,965字などを対象とした場合には、規則性がかかなり増してくるはずである。ただ、日本の漢字の場合、もう一つ困った問題がある。それは日本と中国の文字政策の違いから来る問題で、中国では簡略字素をその字素を含むすべての漢字に流用することを認めているのに対し、日本では、常用漢字以外の漢字を簡略の対象としない。その結果、非常に複雑な状況になっている。表3では、一部例を示す。

**表3 常用漢字表において簡略字素を含む漢字と表外漢字で
同字素を旧体のままで含む漢字（一部）**

常用漢字（旧漢字）		同字素を含む表外漢字
画	（畫）	劃
覚	（覺）	攪
怪	（輕）	頸
狭	（狹）	夾
挙	（舉）	櫟
広	（廣）	曠
専	（專）	轉

したがって、常用漢字よりも広いコーパスを使おうとすると、またそれなりの新しい問題も出てきてしまうわけである。

以上のように、「字素」というアプローチは漢字の構成要素だが、形を優先して考えるか、字源など意味を優先するかによってかなり違う結果になる。方法論的にはもっとも厳しいStalph（1989）では常用漢字を485の字素に分析したが、「留・貿」（434番）の上の部分と、「柳」の右の部分（434番）を分けて考えているのは、やはり形を優先した⁽¹³⁾からと思われる。しかし、字源的・教育的見地からは「留・柳」を同じグループとして考えることが望ましいであろう。

本研究は平成9年度文部省科学研究費基盤A研究(試験)(課題番号07558148)、研究代表者カイザー、シュテファン)・基盤研究(B)(2)(課題番号08458054、研究代表者カイザー、シュテファン)の助成を得た。

注

(1) 本書には中国人学者の手も拘わっていたことは、本文が西洋人と中国人の対話形式をとっている

ることも示唆している。(武田：136頁 参照)

- (2) 小川1981によると、所屬字がまったくないのに『説文解字』でわざわざ「久」部を設けたのは、「灸」など他の部首所屬の字において音符となるからではないかという。
- (3) 形声文字の「音符」以外には、部首以外の部分についての中国語の名称さえ存在しない。
- (4) This idea (= of Primitives) was strengthened by his (=the author's) observing in a manuscript Latin-Chinese Dictionary which classed the characters to their names, that in numerous instances, one character was the root of ten or twelve others, each of which was formed from it by the addition of a single element.
- (5) Of the names sixteen are the same with the primitive; and all the rest, except one, begin with the aspirated initial of the primitive.
- (6) Among these sixty-nine, there are nearly thirty characters which have the same name with the primitive, but scarcely ten which differ from it in both the initial and the final. The general idea is of closing or uniting, closed etc. can be easily traced as combining, in some way, with the greater part of the formatives to suggest the new idea.
- (7) ... such is Marshman's fixation on the role of semantics in character formation that he thinks the primitives "communicate a general idea" and thus completely misses the significance of what is right under his nose. This oversight leads him to far-fetched etymologies based on the meaning of "profitable" or "advantageous" for what the list of characters shows is simply the phonetic use of li⁴...
- (8) ここで「文字」といういているのは、「アルファベットによる語彙を構成する一要素」くらいの意味であろう。
- (9) Williams 1903 のIntroduction (:lix-lxxxiv) にCalleryの1040 Primitivesがリストアップしてある。
- (10) "Textes Troisième dynastie 周 Tchou" となっており、中味は中後期の金文体である。
- (11) この数字は「音符」の数である。
- (12) Kanji ABC divides kanji not for lexicographical but for didactic reasons, and covers all the elements of kanji. These elements are termed graphemes.
- (13) Foerster and Tamura (1994) に、本書の世話になった趣旨のことが書いている。

参考文献

1. Callery J M (1841) *Systema Phonicum Scripturae Sinicae*. 2 Vols. Macao.
2. Chalmers, John (1882) *An Account of the Structure of Chinese Characters under 300 Primary Forms; after the Shwuh-Wan, 100, A.D., and the Phonetic Shuoh Wan, 1833*. London: Trubner & Co.

3. DeFrancis, John (1984) *The Chinese Language: Fact and Fantasy*. Honolulu: Hawaii University Press
4. Foerster and Tamura (1994) *Kanji ABC: a systematic approach to Japanese characters*. Tuttle.
5. Habein and Mathias (1991) *The Complete Guide to Everyday Kanji*. Kodansha International
6. Marshman, Joshua (1809) *Dissertation on the Characters and Sounds of the Chinese Language*
7. Marshman, Joshua (1814) *Elements of Chinese Grammar, with a Preliminary Dissertation on the Characters, and the Colloquial Medium of the Chinese, and an Appendix Containing the TA-HYOH of CONFUCIUS with a Translation*. Serampore: Mission Press.
8. Soothill, William Edward (1889) *The Student's Four Thousand 字 and General Pocket Dictionary*. Shanghai: Presbyterian Mission Press.
9. Stalph, Juergen (1989) *Grundlagen einer Grammatik der sinojapanischen Schrift*. Wiesbaden: Harrassowitz.
10. Wieger, Léon (1899/1932) *Caractères Chinois: etymologie, graphies, lexiques*. 5th ed.
11. Williams, Wells (1903) *Syllabic dictionary of the Chinese language; arranged According to the Wu-Fang Yuen Yin, with the Pronunciation of the Characters as Heard in Peking, Canton, Amoy, and Shanghai*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
12. 阿辻哲次 (1985) 『漢字学「説文解字」の世界』東海大学出版会
13. 小川環樹 (1981) 「中国の字書」貝塚茂樹・小川環樹著『中国の漢字』日本語の世界第3巻、中央公論社
14. 小川環樹他編 (1968) 『新字源』角川書店
15. カイザー シュテファン (1997) 漢字学習各種アプローチの検討(1) —表音的アプローチについて— 筑波大学留学生センター『日本語教育論集』第12号
16. 後藤 朝太郎 (1909) 『漢字音の系統』六合館
17. 後藤 朝太郎 (1910) 『文字の研究』成美堂
18. 朱 駿声 (1848) 『説文通訓定声』
19. 白川静 (1994) 『字統』平凡社
20. 宋代『説文解字五音韻譜』
21. 武田雅也 (1994) 『蒼頡たちの宴』筑摩書房
22. 藤堂明保 (1965) 『漢字語源辞典』学灯社
23. 林大監修 (1982) 『図説日本語 —グラフで見ることばの姿—』角川書店